

〔博士審査結果〕

論文提出者：趙 冰

審査対象論文：中国都市部における高齢者サービスについての研究

―地域社会における共助の視点から―

論文審査委員：李曉東教授、南裕子准教授（一橋大学）、唐燕霞非常勤講師、張忠任教授、
中川敦講師

【論文審査結果の要旨】

本論文は中国都市部における高齢者在宅サービスシステムの構築の可能性についての研究である。

中国では、1990 年代以降市場経済の深化に伴う現代企業制度の確立によって、中国の社会構造は「単位社会」から「社区」へと大きく変動した。さらに、2000 年に中国は高齢化社会に突入した。現状では 90 パーセント近くの高齢者が在宅生活を望んでいるにもかかわらず、一人っ子政策の実施による家族の自助力の低下や、地域社会のつながりが弱体化しているため、高齢者サービスが高まりつつある需要に追いつかず、大きな社会問題となっている。

以上のような背景を踏まえ、本論文は、まず序章で日本における社会福祉研究の成果を十分に吸収して、「自助、共助、公助、商助」に関する理論を参考にしつつ、中国の高齢者サービスに対する考察の枠組みを提示した。著者は中国における高齢者サービス需給現状を概観した（第 1 章）後、建国後の高齢者政策の歴史的推移に対する検討を行い、「単位社会」における公助依存の高齢者福祉から 1980 年代以降の公助依存からの脱却、さらに「自助、共助、公助、商助」の役割分担の高齢者福祉へと変化する政策過程を明らかにした（第 2 章）。続いて、調査地である長春市と大連市の高齢者福祉政策の状況を分析した（第 3 章）。それを踏まえて、長春の高齢者およびその家族に対するインタビューを通して中国都市部における高齢者在宅扶養問題の実情を明らかにし（第 4 章）、さらに、長春、大連両市における社区の取り組みに対する現地調査を通して、地域社会における人々のつながりを再生させて、共助を軸とした高齢者在宅サービスシステムの構築の必要性を説いた（第 5 章）。最後に、現地調査に対する分析を踏まえて、サービスシステムの可能性について展望した（終章）。

現在の中国はまだ十分な社会保障システムを構築していない中で、世界でも未曾有のスピードで高齢化社会に突入した。このような現状の中で、高齢者サービスシステムの構築は喫緊かつ重要な課題である。その意味では、本論文のテーマはこのような現実に応えようとする大変有意義なものである。また、従来、中国の高齢者サービスに関する先行研究は数多く行われているが、個別の事例研究や現状分析のものが圧倒的に多い。これに対して、本論文は日本における福祉社会学分野の理論的枠組みを参考にしながら、中国高齢者

サービスシステムの構築に関する考察を行っており、その試みは従来ほとんど行われてこなかった画期的なものだと言ってよい。論文全体は一定のストーリーを形成しており、しっかりした理論的枠組みと論理的な構成が論文に説得力をもたせている。そうした説得力は、さらに、著者が行った高齢者とその家族に対するインタビュー調査と、地域社会に対する実地調査とによって支えられている。中でも、著者がインタビューを通して被調査者の本音を引き出し、高齢者介護の実情を生々しく伝えたことは高く評価できる。それは同時に著者の優れた調査能力を示している。

一方、論文にいくつかの問題点も存在している。例えば、序章では、仮説を提示すべきところを、先走って結論を述べたような書き方になっていること、「扶養」、「介護」、「高齢者福祉」など、本論文のキーワードとなる概念について十分に概念規定をせずに議論を展開したこと、社区の可能性を中心に議論した一方、社区が持つ限界性について十分に触れていないこと、さらに、文章の繰り返しが散見され、完成度の向上が求められていること、などの問題点である。

しかし、これらの問題点は本論文が有している意義と価値に大きく影響するものではなく、論文は十分に博士学位のレベルに達している。

口頭試問の結果の要旨

口頭試問では、著者は博論の概要について説明した後、論文の特徴を次の四点に分けて説明した。すなわち、①日本の社会福祉分野における先行研究の理論を中国の高齢者サービス問題を研究する枠組みに活用すること、②高齢者及びその家族に対して直接インタビューをし、中国における高齢者扶養問題の現状を明らかにしたこと、③中国の高齢者サービス問題を高齢者政策に対する分析と、高齢者及びその家族に対するインタビュー、社区の取り組みなどを通して立体的に分析したこと、④福祉の原点である「つながり」に立ち戻って、共助を軸とする高齢者サービスシステムの構築を試みたこと、である。

それを踏まえて、審査員及び会場から質疑が行われた。調査先の社区の取り組みは成功例として紹介されたが、それらはどのように一般化しうるのか、また、そもそも東北部に集中した調査事例をどのように中国の高齢者サービス問題として普遍化するのか、そして、何故共助を軸に高齢者サービスシステムを構想する必要があるのか、また、共助の基軸はどこに求められるのか、さらに、論文の研究対象はどのような高齢者を想定しているのか、研究対象の時期はどのように設定されているのか、などの質問が出された。

上記の質問に対して、著者は概ね適切に回答した。まず、一般化・普遍化の問題について、著者は、長春と大連は中国の古い工業基地であり、現代企業制度の改革の中でリストラされた者が特に多く、これらのリストラされた者の高齢化に伴い、彼らに対するサービスのシステムの構築は全国的に見ても最も代表的な事例だと回答した。その場合、高齢者は公助から漏れた在宅高齢者を指している。さらに、共助を軸とする高齢者サービスシス

テムの構築について、著者は、自助力の低下という背景の下で、つながりの伝統文化を再生し、福祉の原点である「つながり」を取り戻すことは、「公助」や「商助」と比べて最も現実的な選択である。その場合、共助は政府、社区居民委員会、多種多様な社会的資源の間の協力が重要だが、中でも社区居民委員会は軸となる存在であるべきだという考えを示した。また、時期について、著者によれば、2006年に政府が社会福祉の社会化を提唱するのをきっかけに、社会福祉がいかに全高齢者に行き渡るかという問題を考えるのが重要な課題として位置づけられるようになったため、2006年以降を研究の中心としたのである。

最終試験結果の要旨

最終試験において、審査員が一同博士論文の意義と価値を評価し、論文は十分に博士学位のレベルに達していることを再確認した。同時に、口頭試問での著者の応答は適切であり、博士論文の趣旨をより明確にさせることができたと評価した。一方、論文に存在している問題点についてより切り込んだ形で確認を行い、改善方法についてコメントした。

審査員からは、「扶養」などの概念を限定して用いる必要性、「互助」と「共助」の関係について議論すべきこと、高齢者サービスを社区における「つながり」だけで支えることの限界性を念頭にその効果を検証すべきこと、序章において仮説を明確に打ち出すべきこと、終章の展望はより具体的な事実に基づいて説明する必要があること、などの意見が出された。

上記の指摘は、論文の根幹に影響するものではないが、これらの問題点をより明確に認識していれば、論文作成のテクニックの向上につながり、論文の論旨をより豊かにすることができる。これらの意見をよく理解した著者は各問題点についての自分の考えを述べ、審査員の意見を今後の改善に活かしたいと発言した。

審査委員会の所見

本論文は、猛スピードで高齢化社会に突入した中国に迫っている高齢者サービスという緊急課題に正面から取り組み、日本の関連分野の先行研究を活用しつつ、しっかりした分析枠組みをもってアプローチしたものである。著者は、精力的なインタビューと現地調査を通して中国高齢者サービスの現状を的確に把握しており、それに基づいた分析と結論も全体としての的確であり説得力を持つものだった。論文の審査と、口頭試問、最終試験を通して、審査員一同は、本論文は博士学位のレベルに充分に達しており、博士学位の授与に値することで一致した。